

41346

教科書

4

810

31 - 1914

2000023618

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

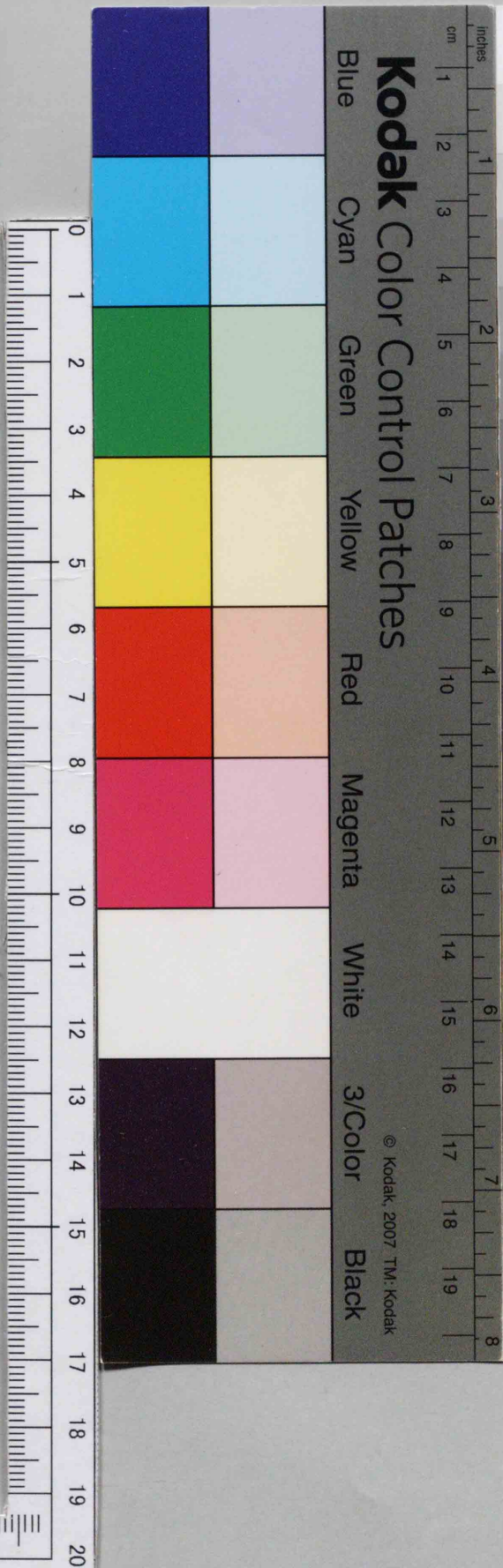


© Kodak 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak 2007 TM: Kodak



375.9
Mo14
資料室

英學小辭典

資料室

375.9
M014



尋常小學讀本

卷五

文
部
省

もくろく

第一	あまのいはと	一	第十四	ていしやば	三十八
第二	春が来た	四	第十五	汽車ノ夕ビ	四十一
第三	神武天皇	五	第十六	かみなり	四十五
第四	水のたび (一)	八	第十七	瓜	四十九
第五	水のたび (二)	十一	第十八	カウモリ	五十二
第六	ナラノ大ブツ	十三	第十九	炭ト油	五十六
第七	コヒ	十五	第二十	蟲のこゑ	六十
第八	母の手つだひ	十八	第二十一	はがき	六十三
第九	かまぬすびと	二十二	第二十二	マツリ	六十七
第十	うめぼし	二十七	第二十三	鹿ノ水カギミ	七十
第十一	茶	三十	第二十四	ひよどりごえのさかおとし (一)	七十四
第十二	蝶	三十三	第二十五	ひよどりごえのさかおとし (二)	七十七
第十三	小子部のすがる	三十六			

廣島大學圖書印

廣島大學 23618 圖書印

御 第

第一 あまのいはと

あまてらすおほみかみ
天照大神の御第に、すさのをのみことといふきのあらい神さまがありました。ある時生馬のかはをはいで、大神がはたをおらせていらつしやる所へおなげ入れになりました。した。大神はおどろいて、あまの岩戸の戸をたてて、その中へおかくれになりました。さあ大へん、今まであかるかつたせかいが

戸

くらやみになつて、わるい神さまがさまざ
 まのわるいことをはじめました。
 よい神さまがたは、どうかして大神にまた
 出ていただきたいと、色々ごさうだんの上、
 一同あまの岩戸の外にあつまつて、おかぐ
 らをおはじめになりました。その時あめの
 うずめのみことといふ女の神さまのまひ
 がおもしろかつたから、大ぜいの神さまが



たは手をたたいて、お笑
 ひになりました。
 あまりおもしろさうな
 ので、大神は少しばかり
 戸をあけて、おのぞきに
 なりました。たぢからを手力男のみ
 ことといふ力のつよい
 神さまが、これをごらん

になると、すぐに大神のお手をとつて、お出し申し上げました。それでせかい中がまたもとのとほりあかるくなつたと申します。

第二 春が来た

春が来た、春が来た、どこに来た。

山に来た、里に来た、

のにも来た。

花がさく、花がさく、どこにさく。

山にさく、里にさく、

野にもさく。

鳥がなく、鳥がなく、どこでなく。

山で鳴く、里で鳴く、

野でも鳴く。

第三 神武天皇

日本ノ一バンハジメノ天皇ヲ神武天皇ト申シ上げマス。コノ天皇ガワルモノドモヲ

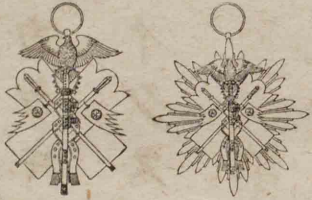
御セイバツニナツタ時、オトホリスデノミ
 チガケハシクテ、オコマリノコトガゴザイ
 マシタ。ソノ時ヤタガラストイフ鳥が出テ
 來テ、オサキニ立ツテ、ヨイミチノ方へ御ア
 ンナイ申シ上ゲマシタ。

又アル時ドコカラトモナク一羽ノ金色ノ
 トビガトンデ來テ、オ弓ノサキニトマリマ
 シタ。ソノ光ガキラ〜トシテ、ワルモノド

モハ目ヲアケテキ
 ルコトガデキマセ
 ン。ソノ光ニオソレ
 テ、皆ニゲテ行キマ

シタ。

天皇ハ國ノ中ノワルモ



ノドモヲノコラズオタ

ヒラゲニナツテ、御ソクキノシキヲナサイ



マシタ。ソノ日ハ二月十一日ニアタリマス
カラ、キゲンセツト申シテ、毎年オイハヒヲ
イタスノデゴザイマス。

第四 水のたび (一)

私はもと雨の一しづくです。そらからふつ
て、山の木のはの上に休んでゐましたが、風
にふかれて、土の上へおちました。

そこで大ぜいと一しよになつて、せまい谷

谷

間

へ下りました。私どものなかまは、出合ふと
すぐに一しよになるのがきまりです。
それから少し來ると、高いがけの上へ出ま
した。一思ひにとび下りると、何だか目がま
はつて、しばらくの間は何も知らずになま
した。きがついて見ると、人が二三人立つて、
「見ごとなたきだ。」といつて、ながめてゐまし
た。

平

美

だんくく来ると、ひろい野はらへ
 出ました。野はらは平ですから、ゆ
 つくりあるきました。鳥はたのし
 さうに時々来て、羽をひたしまし
 た。魚はうれしさうにういたりし
 づんだりして、およいでゐました。
 ひるはあたたかな日にてらされ、
 夜は美しい月をうかべながら、休



尋五

通

畠

なしにあるきました。そばを通る
 人が「美しい川だ」といつて、ほめま
 した。

第五 水のとび (二)

それから田や畠の間を通つて来
 るうちに、右からも、左からも、なか
 まがあつまつて来て、いよ／＼に
 ぎやかになりました。ある時上の



十一

車

方でさわがしいおとがするから、見上げる
と、はしがかけてあつて、人や馬や車がたく
さん通つてゐるのです。

兩

まもなく町の中へはいると、兩がはにいへ
がたちならんで、人がいそがしさうにある
いてゐました。やがて重い物が私どもの上
へ來ましたから、何かと思つたら、にもつを
つんだ船が通つてゐたのです。町の中を通

重

輕

る時にきたない物をなげつけられるのに
はこまりました。けれども重い物は皆そこ
へしづめてしまつて、軽い物は一しよにこ
こまでもつて來ました。
こゝへ來て見ると、ひろくとして、どちら
を見ても水ばかりです。こゝを人が海とい
ひます。

第六 ナラノ大ブツ



日本一ノ大キナホトケサマハ、ナラノオ寺
 ニアリマス。ナラノ大ブツトイツテ名高イ
 モノデス。スワツテイラツシヤル高サガ五
 丈三尺五寸、カホノ長サガ一丈六尺、耳ノ長
 サガ八尺五寸、
 目ノ長サガ三
 尺九寸、手ノヒ
 ラノ長サガ五

尺六寸、中指ノ長サガ五尺アリマス。
 グランナサイ、大ブツサマノマヘニ立ツテ
 キル人が、コンナニ小サク見エマス。

第七 コヒ

池ノ中デコヒガオヨイデキルノヲ見タコ
 トガアリマセウ。大キナコヒガタクサンア
 ツマツテオヨイデキルノハ、マコトニミゴ
 トナモノデス。

鯉ハ昔カラ川魚ノ長トイハレテキマス。ウ
 ロコハカハラヲフイタヤウニカサナリ合
 ツテキテ、兩ワキニアタマカラヲマデーレ
 ツニ、クロイテンノアルウロコガ三十六枚
 ズツナランデキマス。ソノ色ニハクロイノ
 モアリ、赤イノモアリ、白イノモアツテ、皆金
 色ヲオビテキマス。目ハ大キクテ、口ノ右左
 ニハ太イヒゲガアリマス。

鯉ハマコトニキセイノヨイ魚デス。蟲ナド
 ガ水ノ上ヲトシテキルト、ハネ上ツテトツ
 テ食ヒマス。時ニハ二三尺モ高クトブコト
 ガアリマス。
 又ドンナ流ノ早イ川デモ、オヨイデノボリ
 マス。鯉ノタキ上リトイツテ、タキデモ上ル
 コトガアルサウデス。男ノ子ノアルウチデ
 ハ、五月ノセツクニ鯉ノフキナガシヲ立テ

祝 用

マス。鯉ノヤウニゲンキ
ガヨク、大キクナツテ
カラハ、鯉ガタキヲ
上ルヤウニズン
ズンシユツセヲ
セヨトイフ心デ祝フノデセウ。

第八 母の手つだひ

「おはなや、用があるから、ちよつとお出で。」



と、母はだいどころからよびました。
おはなは

「はい。」

といひながら、いそいで行つて見ると、母は流しもとで、まないたに魚をのせて、さしみをこしらへてゐます。



母は戸だなの方をさして、

「そこにおさらがあるから、取つておくれ」といひました。

おはなは戸だなの中から一ばん大きなさらを持つて來ました。母は

「ありがたう。それからそこに切つてあるたけのこをおなべの中へ入れておくれ。」
「はい、これですか。」

と、おはなはざるの中のとけのこをなべの中へ入れました。

「こんどは何の御用をいたしませう。」

母は

「ちよつとお待ち。」

といつて、切つたさしみをさらの中へ入れて、

「手がなまぐさいから、そのひしやくを取

つて、水をかけておくれ。」
といひました。

おはなは水がめから水をくんで、母の手に
かけました。

第九 かまぬすびと

かまをぬすまれたものがありました。ぬす
人はきんじよに住んでゐるゐざりだとい
ふうはさがあるので、行つて見ると、なるほ

どそのかまがあります。大そうおこつて、取
りかへさうとすると、

「この釜は昔から私のうちにある釜です。
私はよその物をぬすむやうなことはない
たしません。」

といつて、どうしてもかへしません。しかた
がないから、うつたへて出ました。

やく人は二人をよび出して、その釜を前に

おいて取りしらべました。うつたへた人は、
 「これは私が毎日使つてゐた釜でござい
 ます。それを私のるすにこのるざりがぬ
 すんだのでございます。」

と申します。又るざりは

「お役人さま、ごらんを通り、私は足の立た
 ないもので、両手をついて、やつとるざり
 あるくものでございます。どうして釜の



やうな重い物が持つ
 て行かれませう。その
 釜は私が前から持つ
 てゐたのでございま
 す。

と申します。

役人はしばらく考へて
 りましたが、そのうちに

ゐざりにむかつて、

「お前のいふことはまことにもつともだ。

この釜はお前の物にちがひあるまい。さ

つそく持つてかへれ。」

と申しわたししました。

ゐざりは大そうよろこんで、その釜をあたまにかぶつて、両手をついてゐざり出ししました。役人は後からこゑをかけて、

後

「こら待て、ゐざり。釜ぬす人はその方にきまつたぞ。」

といつて、下役どもに言ひつけて、しばらくせました。

第十 うめぼし

二月三月花ざかり、

うぐひす鳴いた春の日の

たのしい時もゆめのうち。

五月・六月實がなれば、
 枝からふるひおとされて、
 きんじよの町へ持出され、
 何升何合はかり賣。
 もとよりすつぱいこのからだ、
 しほにつかつてからくなり、
 しそにそまつて赤くなり、
 七月・八月あつところ、

三日三ばんの土用ぼし、
 思へばつらいことばかり、
 それもよのため人のため。
 しわはよつてもわかい氣で、
 小さい君らのなかま入、
 うんどろ會にもついて行く。
 ましていくさのその時は、
 なくてはならぬこのわたし。

第十一 茶

茶



コ、ニ茶ノ木ガアリマス。ハガヨクシゲツ
 テ、下ノ方ハ枝モ見エマセン。マルクカリコ
 ンダニハ木ノヤウニ見エマ
 ス。茶ノ木ノ高サハ大テイ三
 四尺グラキデ、アタ、カイト
 コロニヨクソダツ木デス。
 コレハ茶ノ葉デス。ヨクソダツタ茶ノ葉ハ

種



色デス。



十一月ゴロ白イ色ノ花ガサキマス。花ニハ
 ベンガ五ツアツテ、ヨイニホヒガ
 シマス。ソノ實ハツバキノ實ノヤ
 ウニカタクテ、ソノ中ニマルイ種
 ガニツ三ツツアリマス。

長サガ二寸バカリモアリマス。
 ツヤガアツテ、色ハコイミドリ

コ、ハ茶畠デス。大ゼイノ女ガ茶ヲツンデ
キマス。

茶ハシンメノ出ルジブ
ンニ、ソノデタテノ葉ヲ
ツムノデス。五月ゴロカ
ラツミハジメマスガ、一
バンハジメニツムノヲ
一番茶トイヒマス。ソノ



葉デコシラヘル茶ガ一番ヨイ茶ニナリマ
ス。ソレカラ一月ホドタツテツムノヲ二番
茶トイヒマス。マタ三番茶四番茶マデモツ
ムコトガアリマスガ、ソナニツムト、茶ノ
木ノタメニハヨクナイサウデス。

第十二 蝶

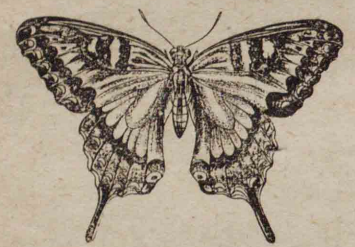
サクラノ花ノ下ニトンデキル白イ蝶ヲ見
ルト、花ガチツタノカト思ヒ、ナノ畠ニアソ



ンデキル蝶ヲ見ルト、ナノ花ガト
 ビ立ツタノカト思ヒマス。又羽ヲ
 タ、ンデ、シヅカニ木ノ葉ノ上ニ
 ネムツタヤウニシテキルノヲ見ルト、ドン
 ナユメヲ見テキルノカト思ヒマス。蝶ハイ
 ツ見テモカハイラシイ
 モノデス。
 蝶ニハ大キナノモ、小サ



黒 原 形



ナノモアリ、羽ノ色ニモ、白イノヤ、キイロナ
 ノヤ、黒イノヤ、マダラナノヤサマぐアリ
 マスガ、ドレヲ見テモ美シウゴザイマス。
 コノ美シイ蝶ガトビマハルノデ、花ゾノヤ
 野原ノケシキガーソウ引立チマ
 ス。キモノノモヤウヤ、カンザシナ
 ドニ蝶ノ形ノツケテアルノモ、ソ
 ノスガタガカハイラシイカラデ

セウ。

コノカハイラシイ、美シイ蝶ヲツカマヘテ
イデメル人ハ、ドウイフ心デセウ。

第十三 小子部ちひさこべのすがる

昔雄略ゆうりやく天皇がすがるといふ人をおめしに
なつて、これをたくさん集めて来いとおほせ
になりました。こといふのはかひこのこと
で、皇后さまがかひこをおかひあそばすた

集

皇后

様

めでございました。

すがるはさうとは心づかず、あちらこちら
をたづねまはつて、

「天子様のおほせだから、子を出すやうに。」

と、たくさんの子ども
をもらつて、つれて来
ました。

天皇はこれをごらん



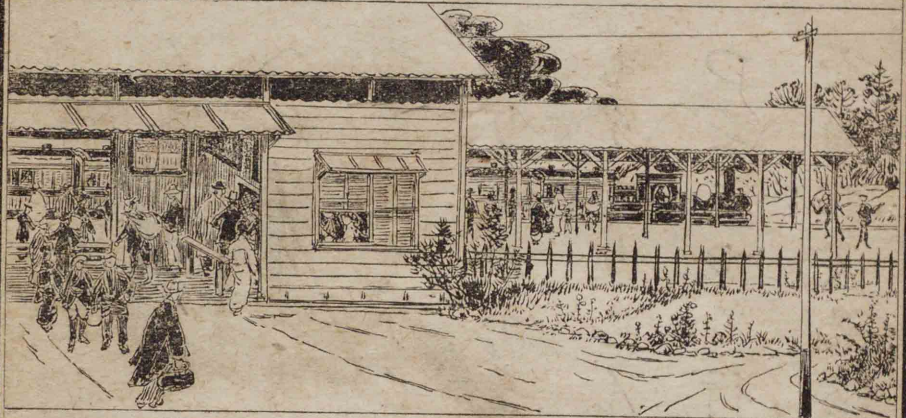
になつて、大そうお笑ひになりましたが、
 「その子は皆お前にやるから、やしなつて
 やるがよい。」
 とおほせになつて、すがるには小子部とい
 ふ姓をたまはりました。すがるはその大ぜ
 いの子をおみやのそばでやしなつて居つ
 たと申します。

第十四 ていしやば

汽車が今ていしやばへつきました。下りる
 人もあり、のりこまうとする人もあり、むか
 へに來た人もあり、見おくりに來た人もあ
 つて、大そうこみ合つてゐます。
 下りる人がまだ下りてしまはないうち、
 もうのりこんだ人もあります。かばんを持
 つて走つて行く人もあります。まだきつぷ
 を買つてゐる人もあります。

切符

荷物



かいさつ口では切符をしらべてゐます。こちらの方は、これからのる人の切符を切つてゐるのです。あちらの方は、今下りた人の切符をうけ取つてゐるのです。えきふが小さな車の上へ、山のやうに荷物をつんで來ま

間
時間

文

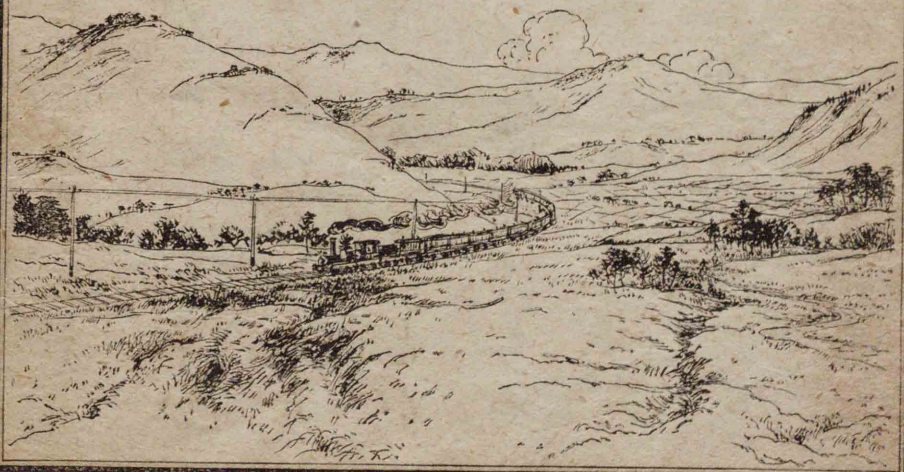
した。あれは今のつた人の手荷物でせう。もう汽車が出ます。まだむかふからいそいで走つて來る人があります。あの人はもう間に合はないでせう。汽車はどんなことがあつても待ちません、きまつた時間にちやんと出ます。

第十五 汽車ノタビ

文 太郎ハ父ニツレラレテ、ハジメテ汽車ニ

道

ノリマシタ。マドカラ外
ヲ見テキルト、山モ川モ
野原モ林モ後ノ方ヘト
ンデ行クヤウニ見エマ
ス。田デハタライテキル
人モ、道ヲ通ツテキル人
モ、馬モ車モ今見エタカ
ト思フト、スグ後ニナツ



向

テシマヒマス。

走ツテキル汽車ガスレチガフ時ニハ、向フ
ノ汽車ニノツテキル人ノカホハヨク見エ
マセン。向フノ汽車カラコチラノ汽車ヲ見
テモ、同ジコトデセウ。

音

ソノウチニ下ノ方デカミナリノヤウナ音
ガシマシタ。文太郎ハフシギニ思ツテ外ヲ
見ルト、汽車ハハシノ上ヲ通ツテキマシタ。

急

汽車ハ急ニマツクラナ所ヘハイリマシタ。
文太郎ハビツクリシテ、父ニキ、マスト、
「コレハトンネルトイツテ、山ヲホリヌイ
タ所デス。」

トイヒマシタ。

トンネルヲ出ルト、マタ明ルクナツテ、ヒロ
イ海が見エマス。文太郎ハヨロコビテ、海ダ、
「海ダ。」トイツテキルウチニ、又暗クナツテ、何

暗

明

吉

モ見エマセン。ケレドモコソドハミジカイ
トンネルデ、スグニ通りヌケマシタ。
左ヲ見テモ、右ヲ見テモ、ケシキガカハルノ
デ、文太郎ハオモシロクテタマリマセン。
汽車ガ文太郎ノ行ク町ヘツイタ時、文太郎
ハモツトノツテキタイト思ヒマシタ。

第十六 かみなり

ある日友吉と音次郎の二人がよそからか

へつて来る道で、にはかに雲が出て、かみなりが鳴り出しました。はじめのうちは遠くの方にきこえてゐましたが、だん／＼近くなつて、雨もつよくふつてきました。

音次郎はおどろいて、道ばたの高い木の下へにげこみました。友吉は

「早くこつちへ来たまへ。かみなりの鳴る時には、そんな所にはあぶない。」

といつて、そこをのかせようとしましたが、音次郎はなかくき、ません。友吉は

「かみなりは高いもののある所へおちるのだ。この間先生がおつしやつたではな
いか。」

といつて、むりに手をひつぱつてつれ出しました。

音次郎が木の下を出ると、間もなく目がく

顔

らむやうないなびかりがして、耳がさけるやうなおそろしいかみなりが鳴りました。二人は思はず耳に手をあてて、そこにたふれました。しばらくたつて、顔を上げて、そのあたりを見まはすと、かみなりがおちて、その高い木がまつ二つにさけてゐました。音次郎は友吉のかたに手をかけて、

「あゝ、あぶなかつた。もし君が居なかつた

僕

ら、僕は死んでしまつたのだらう。」
といひました。

第十七 瓜

瓜

西瓜

キ瓜・マクハ瓜・白瓜・夕顔・西瓜・トウ瓜・カボチヤ・ヘチマ・ナドヲ瓜・トイフ。マヅ形・カライヘバ、キ瓜・白瓜・ヘチマ・ハ細長ク、トウ瓜・ハ太ク、カボチヤ・ハ平タイ。マクハ瓜・ヤ夕顔・ヤ西瓜ニハ、マルイ形ノモ、長イ形ノモアル。キ瓜ニ

平

他 黄



ハカハニ小サイトゲガアリ、カ
ボチヤニハデコボコガアル。ソ
ノ他ノ瓜ハ大テイナメラカデ
アル。
カボチヤハ中ガ黄色デ、西瓜ハ
中ガ赤イ。西瓜ノ種ハ大テイ黒
イガ、ソノ他ノ瓜ノハ白イノガ
多イ。

生

西瓜ハ中ヲタベテ外ヲノコシ、
ソノ他ノ瓜ハ外ヲタベテ中ヲ
ノコス。ナマデソノマ、タベル
ノハ、マクハ瓜ト西瓜デ、ニナケ
レバタベラレナイノハ、カボチ
ヤトトウ瓜ト夕顔デアアル。キ瓜
ヤ白瓜ハ生デ瓜モミニシテモ、
ツケ物ニシテモタベ、又ニテモ



タベル。へチマハワカイウチハタベラレル
 ガ、實ガイルトタベラレナイ。
 瓜ノ葉ハ廣クテ、トゲノハエテキルノガア
 ル。花ハ夕顔ダケガ白クテ、ソノ他ハ皆黄色
 デアル。

瓜ノツルニハナスビハナラヌ。

第十八 カウモリ

昔鳥ノ仲間トケモノノ仲間ガケンクワヲ

シタ時、カウモリハ

「私ハ鳥デモケモノデモナイカラ。」

トイツテ、ドチラヘモツキマセンデシタ。ソ
 ノ中ニケモノガ勝チサウニナツタノヲ見
 テ、ニハカニ

「私ハカラダガネズミニニテキルカラ、ケ
 モノノ仲間ダ。」

トイツテ、ケモノノミカタニナリマシタ。



シバラクタツト、ケモノガ負ケ
サウニナツタノデ、コンドハ

私「ハ羽ガアルカラ、鳥ノ仲間
ダ。」

トイツテ、鳥ノ方ニツキマシタ。」

イツマデタツテモ勝負ガツカ
ナイカラ、兩方が仲ナホリヲシマシタ。ソノ
時カウモリガケモノノ方ヘ行キマスト、

オ前「ハ鳥デハナイカ。」
トイツテ、仲間へ入レマセン。又鳥ノ方ヘ行
キマスト、

オ前ハケモノダラウ。」

トイツテ、アヒテニシテクレマセン。シカタ
ナシニ、ヒルノ間ハ木ノウロヤ穴ノ中ニカ
クレテキテ、夜ニナルト出テ空ヲトビア
クヤウニナツタトイフハナシデス。

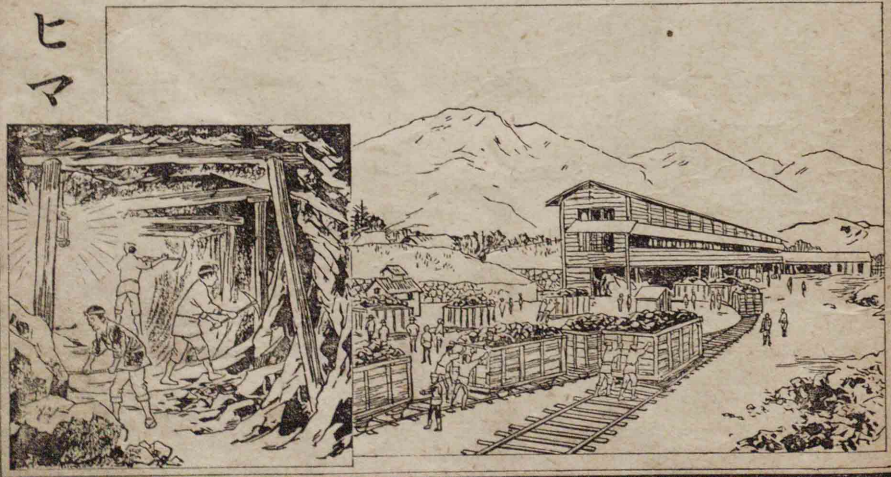
第十九 炭ト油

人ハ火デ物ヲヤイタリ、ニタリシテタバマス。又サムイ時ニハ火ニアタリマス。夜ニナレバ火ヲトボシマス。火ヲ使フコトノ出来ルノハ人バカリデス。鳥ヤケモノハ火ヲ使フコトヲ知リマセン。

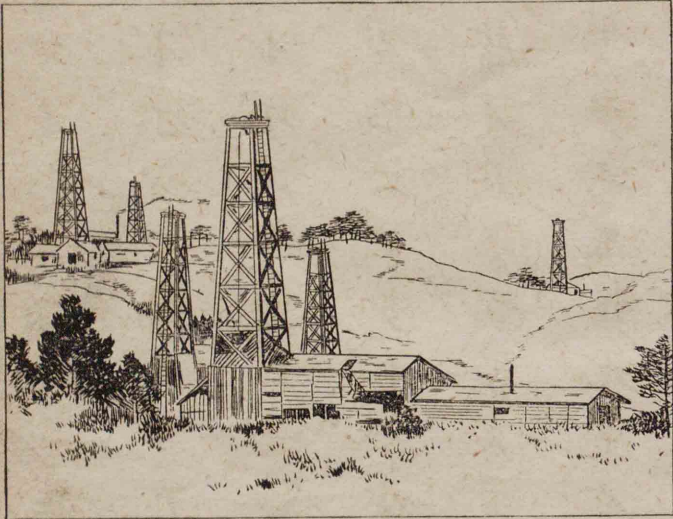
大昔ハ木ト木ヲコスツテ火ヲ出シマシタガ、ソレカラ後ニハ石ト金ヲウチ合セテ出

スヤウニナリマシタ。近ゴロハ又マツチトイフベシリナ物が出来テ、火打石ヤ火打金ヲ使フ人ハメツタニアリマセン。

火バチナドニ入レル炭ハ、木ヲヤイテコシラヘタモノデス。ソレユエ木炭トイヒマ



ス。ソノホカニ石炭トイフモノガアリマス。
 コレハ大昔ハエテキタ木ガ土ノ中ニウマ
 ツテ、シゼント出来タ物デ、石ノヤウニカタ
 クナツテキマスカラ、石炭トイヒマス。石炭
 ノ火ノカハ木炭ヨリモズツトツヨイノデ、
 汽車ヤ汽船ヤソノ他ノキカイナドヲウゴ
 カスノニハ、皆コレヲ使ヒマス。
 油ニモ色々アリマス。魚カラトツタモノモ



アリ、ケモノカラトツタモノモアリ、シヨク
 ブツカラトツタノモアリマス。アンドンニ
 トボスノハ大テイナタ
 ネカラトツタ種油デス。
 ランプニトボスノハ石
 油トイヒマス。コレハ地
 ノ中カラシゼントワキ
 出ルモノデ、ワキ出タマ

マノハニゴツテキマスガ、シアゲルト、スキ
トホツタ油ニナルノデス。ランプニ石油ヲ
トボスヤウニナツテカラ、アンドンハダン
ダンニスタレテ來マシタ。
昔ノ人ハ石炭ノコトヲモエル土、石油ノコ
トヲモエル水トイヒマシタ。

第二十 蟲のこゑ

あれ、松蟲が鳴いてゐる。

ちんちろ〜

ちんちろりん。

あれ、鈴蟲も鳴き出した。

りん〜〜〜

りいんりん。

あきの夜長を鳴き通す、

あゝおもしろい蟲のこゑ。

きり〜〜〜

こほろぎや、

がちやくくく

くつわ蟲、

あとから馬おひおひついて、

ちよんくくく

すいつちよん。

秋の夜長を鳴き通す、

あゝおもしろい蟲のこゑ。」

秋

讀

第二十一 はがき

「ねえさんの所からお手紙が来てゐます。讀んでごらんなさい。」

と、母は手紙をおちよにわたしました。おちよは取上げて讀んで見ると、

あさつては八まんさまのおまつりですから、朝早くからあそびにいらつしやい。おはなさんもつれて一し

よにお出でなさい。

九月十三日

あねより

おちよさま

と書いてあります。おちよはよろこんで、母にはなしますと、母は

「あさつては學校がお休ですから、二人とも行つてお出でなさい。それから今すぐにへんじを書いてお出しなさい。」

習

おちよ「それでも私はまだ手紙の書き方を習ひませんから、どう書いてよいかわかりません。」

母「お話をする通りに書けばよいのです。」

あ、こゝに葉書があります。」

おちよはしばらく考へて、葉書の裏へ次のやうに書きました。

お手紙をいたゞいて、まことにうれ

裏

話

表

しうございます。あさつてはおはな
さんと一しよにきつとまゐります。
それを母に見せますと、母は

「よく出来ました。これでよくわかります。
そのおしまひのあいてゐる所へ、おかあ
さんからもよろしく。」と書きたして下さ
い。それから表の方へあて名を書いてお
出しなさい。」

森

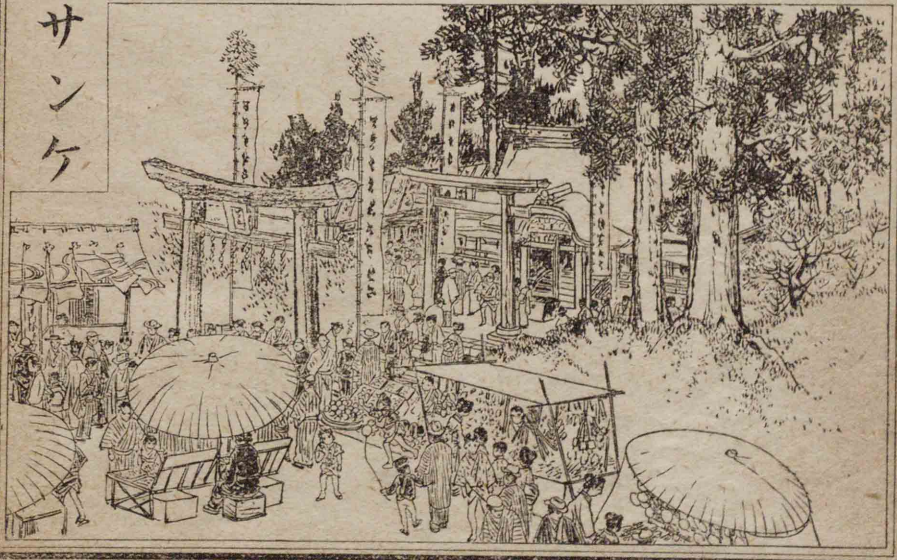
といひました。

第二十二 マツリ

大キナ字ヲ書イタ大キナノボリガ立テテ
アル。イサマシイタイコノ音が森ノ中カラ
キコエテクル。道ノ兩ガハニハ、アメヤオモ
チヤヤクダモノヤクワシヤナドガ店ヲナ
ラベテキル。子ドモハフダンヨリハ美シイ
着物ヲ着テアソンデキル。

着

オチヨトオハナハアネ
 ニツレラレテ、オ宮ニサ
 ンケイシタ。大キナ鳥居
 ノ下ヲ通ツテ、石ダンノ
 道ヲ上ツテ、モウ一ツ小
 サナ鳥居ヲクヅルト、オ
 宮ガアル。オ宮ノ正面ニ
 大キナ鈴ガ下ツテキル。サンケ



イスル人ハ皆カハルド、コレヲ鳴ラシテ
 ヲガム。オチヨモオハナモ鈴ヲ鳴ラシテヲ
 ガンダ。
 オ宮ニハエマガタクサンカケテアル。古イ
 ノモ新シイノモアル。ヨシツネ・ベンケイノ
 エモアリ、ニタンノ四郎ノエモアル。又日本
 ヘイガロシヤヘイトタ、カツテキルエモ
 アル。

客

晩

鹿

才宮ノ裏デハ今スマフガハジマツテキル。
勝負ガ一番スムト、ワアツトホメルコエガ
キコエル。見セ物ゴヤデ客ヲヨブコエヤラ、
フエ・タイコデハヤシタテル音ヤラ、ニギヤ
カナコトデアアル。晩ニナルト、花火ガ上ルト
イフ話デアアル。

第二十三 鹿ノ水カバミ

鹿ガ水ヲノマウト思ツテ、谷川ノ中ヘハイ

角

リマシタ。フト水ニウツツタジブンノスガ
タヲ見テ、アタマカラ足マデツクぐトナ
ガメテ、ヒトリゴトヲハジメマシタ。

「ジブンノ角ハジツニリツバナ物ダ。牛ノ
角トハチガツテ枝ガアル。毎年春ニナル
トオチルガ、オチルトスグ又新シイノガ
ハエテ、ソノタビニ枝ガ一ツツツフエル。
角ノアルケモノモタクサン知ツテキル

強 弱



ハ細クテ、イカニモ弱サウニ見エル。出來ルコトナラ、モツト太クテ強イ足ガホシイモノダ。

ガ、コンナリツ
パナ角ヲモツ
テキルモノハ
ナイヤウダ。ケ
レドモコノ足

匹

追

ソノ時後ノ方カラカリウドノ來ル音ガシタノデ、オドロイテカケ出シマシタ。タクマシイ大キナカリ犬ガ四五匹デオツカケテ來マス。鹿ハ輕イ足デズン〜ニゲテ、林ノ中ヘカケコミマシタ。カハイサウニ美シイ角ガ木ノ枝ニヒツカ、ツテ、イクラモガイテモハヅレマセン。トウ〜犬ニ追ヒツメラレマシタ。

第二十四 ひよどりごえの

さかおとし

(一)

守

へいけのぐんぜいがふくはらのしろを守
つてゐる。東生田の門から西一の谷の門ま
での間、北は山のふもとから南は海の波打
ぎはまで、人や馬でふさがつてゐる。又海に
は一面にいくさ船がならんでゐて、海とを
かとおし立てた何千本の赤はたは、まる

千

分

で火のもえたつたやうに見える。

げんじは二手に分れて、のりよりのぐんぜ
いは東の門へ向ひ、よしつねのぐんぜいは
西の門へ向つた。しかしよしつねは表から
攻めおとすことはむづかしい。何でも裏か
らまはつて、てきのふいをうたなければな
らぬ。と考へて、強いものばかり三千人をす
ぐつて、こつそりと裏道からひよどりごえ

攻

暮

に向つた。この中にはべんけいも居つた。ひよどりごえはしろの北の方にあつて、よつほどけはしい所である。ふだんは人も通らない道だから、どこをどう行つてよいかわらない。そのうちに日が暮れて、まつ暗になつてしまつた。

この時べんけいは火の明りをたよりにたづねて行つて、一人のかりうどをつれて來

尋五

尋五

丈

た。見ると丈の高い、たくましい男である。手にはかりに使ふ弓矢を持つてゐる。年はいくつか。と問へば、「十七」と答へた。よしつねはよろこんで、刀やよろひをやつてけらいにした。

第二十五 ひよどりごえの

さかおとし (二)

よしつねはまづたづねた。

七十七

阪

聞

「こゝからしろの方へ下りることが出来るか。」

「とても出来ません。しろの後にはけはしい阪で、馬の通れる所ではございませぬ。」

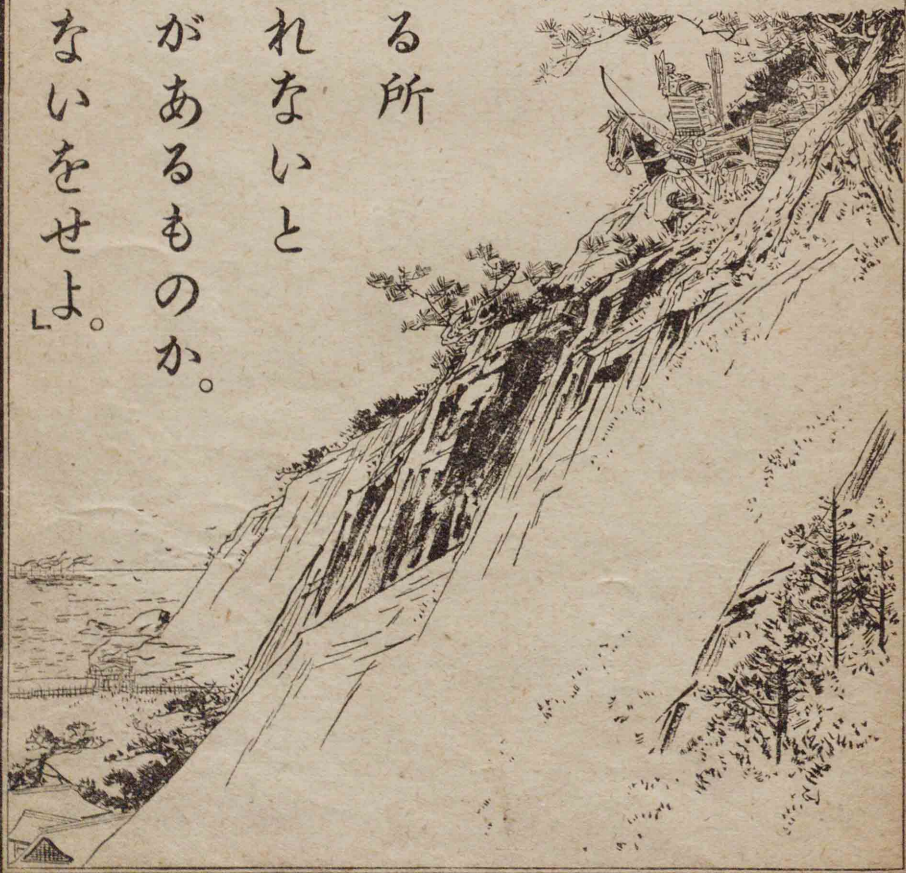
「鹿はどうだ。」

「鹿はをりくゝ通ります。」

よしつねはこれを聞くと、

「鹿も四つ足なら馬も四つ足、たゞつめが

われてゐるとゐないだけのちがひだ。鹿の通れる所を馬の通れないといふことがあるものか。さあ、あんないをせよ。」



下
東
西

と言ひつけて、夜のうちにがけの上まで出た。まもなく夜が明けた。見下せば、しろは何十丈あるか知れないがけの下にある。東西の二門は今いくさのまつさい中である。へいけ方はがけの上から、てきの軍ぜいが攻めこまうとはゆめにも思はない。よしつねはこゝぞと思つて、「進めく」とさしづをしたが、馬もこはがつてすくんでしまひ、人

進
軍

城

も顔を見合せて進まうとはしない。この時よしつねは、「われを手本にせよ。」といひながら、馬に一むちあててかけ下りた。これを見た三千人の軍ぜいは、どつと一時にかけ下りて、城の中へ攻めこんだ。へいけはふいを打たれて、どうすることも出来ない。三方から攻立てられて、さんぐにう

ちやぶられた。

をはり

大正三年九月五日修正印刷
大正三年九月八日修正發行
大正三年九月十日翻刻印刷
大正三年十月十五日翻刻發行

著作權所有

著作兼
發行者

文 部 省

尋常小學讀本卷五

定價金八錢

翻刻發行
兼印刷者

東京市小石川區久堅町百〇八番地
日本書籍株式會社

代表者 大倉保五郎

印刷所

東京市小石川區久堅町百〇八番地
日本書籍株式會社工場

大正三年九月十五日
文部省檢査濟

發賣所

東京市日本橋區新右衛門町十六番地
株式會社 國定教科書共同販賣所

